

Changes in pelvic shape among Japanese pregnant women over the last 5 decades

メタデータ	言語: jpn 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2020-10-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鳴本, 敬一郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003755

論文審査の結果の要旨

女性の骨盤形態と周産期アウトカムの研究は1950年代を中心に盛んにおこなわれてきた。近年、児頭骨盤不均衡に対する骨盤レントゲン検査は分娩アウトカムの予測には不正確であり推奨されていない。これに伴い骨盤形態そのものに対する研究の関心は薄れてきた。高橋らの観察研究(1985)では、1960年代から1980年代にかけて類人猿型骨盤が20%増加していることが示された。しかしその後、骨盤形態に関する疫学的研究は行われていないことから、申請者らは、ある地域の市中病院で妊婦の骨盤レントゲン写真が蓄積されていたことに注目し、日本人妊婦の骨盤形態の近年の分布とその経時的変化について調査した。

2010年5月から2012年8月の分娩記録(N=517)から抽出された計326名の日本人妊産婦において、骨盤レントゲン写真で骨盤入口面縦径と横径を測定し、Brim Depth Indexによる骨盤形態の分類を行った。歴史的比較による骨盤形態の分布の推移と骨盤形態と母体背景との相関性を検討した。

その結果、類人猿型46.3%、女性型43.6%、扁平型10.1%と類人猿型の割合が大きく、過去50年間で類人猿型が約40%増加し、女性型と扁平型が約20%減少していた。骨盤形態による母体身長、Body Mass Index、骨盤入口面面積に相違はみられなかった。身長と共に骨盤前後径、横径、骨盤入口面積は正の相関を示すものの、身長と骨盤形態、骨盤形態と骨盤入口面面積との関連性はみられなかった。

審査委員会では、近年の日本人妊婦の骨盤形態は類人猿型の割合が大きく、過去50年間で約40%増加していることを明らかにし、分娩過程や骨盤形態の形成過程に新たな視点を投げかけたことを高く評価した。

以上により、本論文は博士(医学)の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 松山 幸弘

副査 岩下 寿秀

副査 藤澤 泰子